

田辺聖子

長篇全集

猫も杓子も
女の食卓

聖子長篇全集

猫も杓子も
女の食卓

田辺聖子



文藝春秋

田辺聖子長篇全集

4

猫も杓子も
女の食卓

一九八二年一月一日第一刷

定価 一八〇〇円

著者 田辺聖子

発行者 杉村友一

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三
電話(〇三)二六五―二二一

印刷所 凸版印刷

製本所 矢嶋製本

製版所 加藤製版

万一、落丁乱丁の場合は

お取替え致します

田辺聖子長篇全集第四卷／目次

猫も杓子も

5

女の食卓

209

解説 小松左京

331

A D 装幀
坂田政則 灘本唯人

田辺聖子長篇全集第四卷

猫も杓子も

御堂筋の雨の夜

1

テレビ局の入口の階段を登りかけて、わたしは通せんぼをされた。顔をあげると雁中キヨシである。会ったって、どうということもない。彼は茶色のカーコートに、両手はズボンのポケットへつつこんでいる。わたしが右へゆけば右へ、左へゆけば左へ廻って、舗道まで追いつめた。といって、ふざけてたのしそうな顔をしているのでもない。何やらムツツリしているから、わたしも面白くない顔で立ち止まった。

痩せた男である。役者で、関西劇団の中ではちょっと名を知られかけた青年で、今はテレビタレントとして忙しがつている男である。

あたりに誰もいないのを見てキヨシは、

「どうですか、近頃」

とよそよそしくいって、胸板へ触れんばかりに近寄ってきた。

「相変らずご盛んですか」

ときたまんだ。

「あ。キヨシちゃんこそ……」

「うそつけ。情報上ってんぜ。このごろ、いつも歩いてるやつ……」

「誰のこと」

「知ってるんだったら。背の高い大きな奴でさ。おれ、見たことあるねん、ずいぶん親しそうやったぞ」

キヨシは標準語と大阪弁をちゃんぽんに使う。それは多分に意識的なもので、よくコントロールされた大阪弁である。

わたしが肩をすくめていると（思い当たらない）、

「ほら、赤いネクタイなんか、しやがって」

悟か。

「あほらし。あの子は違いますよ」

「どうかな。顔色かわってるよ」

キヨシはいやにしつこい。笑いにまぎらせているが、ほんとに真剣なにがみが唇に浮かんでいて、

「罪人だよ！」

と悪意のある強さで、わたしの背中をどおん、と叩いた。それから堂島ゆきのバスが来たので彼は乗ろうとして、

振り向き、

「また電話しな！」

「あほ、誰が」

「気が向いたら、寝てやってもいいぜ」

「撲るよ」

と毒づき合つて別れる。何ん吐^かしてけつかる、という氣持。ロマンもハチノアタマもない。何という恋の終り。昔はいち仲だったではありませんか、ケンカもせず、しぜんにいつとなく別れたのに、何も今更、毒づくことはないではないか、とわたしはうつとうしくなる。

悟なんかとつき合つていても、それはもうキヨシとは關係がないことなのに、昔、いつとき愛し合つたというだけで、いつまでも昔の女に發言權があるように思つてゐるのかしらん。愛がなくても人間は嫉妬だけはもつものかもしれない。

尤も、キヨシのちよつかいも、毒舌も、もしかしたら愛情の裏返しかもしれない。まだわたしのことを考えていて、いちいち氣になるからかもしれない、とも思える。輕蔑したような、ツンツンした態度や言葉でしか、関心を示せない人間が、現代には多い。

それは、わたしだつてキヨシをきらいといふのではない。彼は相変らず綺麗な顔をしていて、お尻は小さくて恰好いいし、脚はきれいだし、彼をこっそら愛していると思わなくとも、彼を見ているとある種の感情が、わたしの中に溜^かれずに残っているのがわかる。キヨシの瘦せた軀をじろじ

ろと見ていると、いいようのない思いが溢れてくる。ふしぎな感情である。彼の軀を、自分は知りつくしているのだと思うと、彼が痛々しく氣の毒に思えるのである。

まあ、この人は、わたしにすっかり知りつくされて、というような惻隱^{そくおん}の情である。にがい、しみじみした痛みである。それもこれも、わたしが人のいい女だからかもしれないけど。

キヨシにかぎらず、わたしは男たちにひどい仕打ちをしたことはない。つき合つて、自分から離れたことは一度もない。いやになつたら、向うから別れるように仕向けさせる。だから、みんなはわたしのこと、わるくはいってないはずだ。

お人よしとなめてる奴もあれば、どっかわからんトコのある女や、と思つてゐるものもあるかもしれないが、ワルモノだという男はないはずである。

色氣はない、という男もあるし、いやいや満更でもないよ、というやつもいる。自分ではどうかかわからない。

わたしは悟にいわせると、キューピー人形みたいな顔だそうだが、もう何年も前から二十一、二だろうといわれているが、ほんとには三十歳である。これは誰も知らない。

わたしはあんまりお化粧しない。しなくても綺麗だから、それで若く見られている。いつも少年みたいなボサボサ頭に、手編みの毛糸帽をかむつて、短いコートにブーツをは

いてつくろわないうをして、スタスタ歩く。
悟は、わたしのことを二十四、五だと思ってるらしい。
二十四、五の女がハタチに見えるとはバケモンやという。
ほんとは三十だよといったら、フランケンシュタインやというかしらん。

2

三十歳のことを、ちょっといっておく。

昔、わたしは、女が三十にまでなつて、ようも生きてるもんやと思つた。三十から先は灰色の夢も希望もない人生の終着駅みたいな感じであつた。生き恥をさらして、死すべき命永らえているとしか、思えなかつた。でも、いまわたしは三十になるのでわれながら呆れているのである。もつとも、ヒトゴトみたいな氣もする。

時間や歳月はわたしのそばを勝手に通りぬけるだけで、わたしを何一つ変えはしない。

昔、わたしは三十になると、人間、卒然と人生観が変り、たちまち分別そなわり条理をわきまえ、解脱して悟りをひらき、オトナの仲間入りをするのだと思つていた。

でもそんなことはウソである。わたしは昨日の続きのわたしで、どこにも変つたところはない。

何年も前からわたしの顔はツルンとしていて、しわもソバカスも出来てない。

軀は太りも瘦せもしないかわりに、たいして賢くなつたとも思えない。

要するに、三十という数字に眩惑されるのに違いない、とわたしは思い當つた。昔の人は社会が安定していたから、みんな一律に同じようにトシをとつてゆき、ハタチや三十で、くぎりをつけられたに違いない。

でも今は、一人一人、トシのとりかたが違う。わたしは自分で、三十やなァ、とつくづく思つたとき、はじめて三十になつたんだと思うことにする。

それまではみんながいうように、二十一、二のつもりでいる。自分がそう思っている間は、人もそう思うだろう。

人間のトシなんて、主観的なものなんだ。

猫も杓子も、同じように一つずつ、トシとるなんてもんじゃない。

わたしはいろんな職業をやつて来た。マンガをかいいたり、さし絵をかいいたり、少女雑誌に詩や小説をかいいたり、手芸や細工ものまで作る。デパートに夏木阿佐子のコーナーというのがあつて、絵皿や人形を売つていたりする。私の絵は、若い女の子や少女たちに人気があるのである。

そっちの方でも結構忙しいので、本町のアトリエに閉じこもつていれば仕事はいくらもあるが、余分にテレビの仕事をしている。

ドラマをかいいたり構成したり、時によると出演すること

もある。雰囲気が好きなのと、いろんな男の子に会えてたのしいからである。

製作部の部屋で仕事の打ち合せをし、喫茶店でコーヒーを飲んで帰り途、録音をしているスタジオをのぞくと、ラジオ番組「こよいあなたと」をとっていた。舌ったらずのいい方をする可愛い女アナウンサーが、天使のごとく舌を出してトチったおわびをしている。

「お入り」

と男アナウンサーが椅子をすすめてくれたので、わたしは調整室の機械の前で煙草を喫った。アナウンサーはワイシャツのボタンをちぎらせていた。

「早うお嫁さん貰わんとあかんねえ」

といてやる。

「阿佐ちゃん、来てくれるか」

「やなこった」

「ひと晩でええわ」

「よけいわるいわ。よういわん」

で、みんな笑う。エレベーター前のミルクスタンドを通りかかると、PR部の男が胃弱らしい青黒い顔をして、にがいコーヒーを飲んでた。

「からだ大事にして下さいよ」

と声をかけると、彼は陰気くさく、

「子供大きいなるまで、もたへんわ」

「しっかり頼んまっせ」

「金気と食い気に追われてもう……」

「色気はてんでなしか」

「あんたと一緒や」

などという言葉を聞き流して、スイスイ歩き廻ったり、役者や先生や主婦やいろんな人間がごたごたと渦巻いている、局の廊下をかき分けるように縫って歩くのが、わたしは好きだった。ときどきゲストに來ている顔見知りの誰かれと話したり、スタジオへまでついて入って、からかったり邪魔したりするのがわたしは好きだ……好きだった。しかし今日は、というよりこの頃は、そんな遊びをして時間をつぶすのが、漠然とつまらなく思えてきた。それに今日はゆく所がある。

化粧室で鏡に向いていると、友達デザイナー、伊吹レイ子がぱったり入って來た。

「あ、来てたん？」

と彼女はいう。奥さま教室の服の更生コーナーの講義を録画に來たそうだ。

「わたしはもう、済んだ。ご飯でも食べにいく？」

「今日は都合わるいの、またにして」

「へー」

とレイ子は吼えるようにいってわたしの顔をのぞき、
「悟かいな」

3

といいながらあわただしくハンドバッグの口をあけてア
ンネをとり出すと、バターン！ とドアをあけてトイレに
駆けこみ、またも手荒くドアを閉めた。つづいてタイルも
破れそうな水音、ちよつと太り肉の彼女はうつむいてしゃ
がむと、「ふうふう」という荒い鼻息まで聞こえてきた

――男の前では、水準なみ以上のレディだが、女同士の前
では必要以上につくろわれない、そういうタイプの女だった
が、わたしはレイ子がきらいではない。間がぬけていてこ
すっからく、うそつきなようにでバカ正直な所があり、まあ、
当節としたら、いい方の部類の女ではないかしらん。

梅田のビルの中に店をもっていて、新聞やテレビにも名
前を売っている。これもトシのわからない女たちの一人で
ある。

出てくると、さっぱりした、後光のさすような輝かしい
顔をしていた。

「雨、降ってるさかい、まっすぐ家に帰ってもしようむな
い、思うて」

「雨？」

「はあ、さつきからえらい降りやった」

このビルの中では、雨も雪も、昼も夜もわからない。人
工の温気、人工の照明。しかし雨と聞いたら、わたしは早
く、出ていきたいくなった。

都会の雨はわるいものではない。

「若い子は可愛らしいけど、すぐ金貸せ、とくるからきら
いやな」

とレイ子は、わたしのデートの相手が悟であるときめた
ようにいう。レイ子が遊んでいる、ミノルも二十一、二の
男である、これは女のようにミイちゃん、と呼ばれている。
電気器具専門の大きな店の店員である。

レイ子は口のうるさいお袋と住んでいて、ミイちゃんと
外で逢いにくいものだから、わたしのアパートの部屋を貸
してやったことがある。二時間の約束で帰ってみると、二
人はまだ夢中でこんなことをいっていた。

「伊吹さんはどうして結婚せえへんの」

とミノル。

「貰い手がないのね」

とレイ子はガードルを着けながら機嫌よくいっている。

「僕、考えとく」

ミノルは調子よく口を合わせている。

「僕と結婚する気、ある？」

「うれしいけど、仕事もあるし、どうしよう？」

「仕事なんか止めなさい、僕が食べさしたげる」

「うそでも嬉しいわ。そういうて貰たら」

「僕ねえ、やっとわかった。なんで僕に女の子が出来ない

のか。誰と話してもあんたと同じ調子になってしまふねん。あんたは特別の人やのに」

「そうよ、わたしみたいな女、いるもんですか」

二人は大きな音をたててキスしていた。それから二人とも、こっちを見てにっこりし、

「やあ、お帰り」

世の中には、どんなにしてもきまりわるくさせたり、うろたえさせたりできない鉄面皮な人種がいるものだ。この二人がそうである。わたしはあれから、二人に部屋を貸さないことにしている。

レイ子はお袋のワルクチをはじめた。料亭をもっていて、口やかましくてケチで強欲な女将^{おかみ}で、外ではけっこう女史や先生で通るレイ子が、家では小娘同然、お袋の一喝にちぢみ上り、いう通りになっている。レイ子がそのトシまで結婚もせずに一人でいたのは、お袋がうるさくて、縁談にケチをつけ、結局は娘を手もとに置きたいからなのだ。

「毎朝、親子の縁切って大ゲンカして出てくるねん。——けど、夜はやっぱし帰らんならん……母親と娘って、これは仕樣ないね」

レイ子はいった。

「今夜はミイちゃんでもごはん食べればどうやのん？」

わたしがいうと彼女は煙草の煙を吐き、つくづく、という調子で三十年の人生のトータルともいふべき感慨を吐露

した。

清廉^{せいれん}な人間にとってこの世は何と生きにくいものだろう。人間は豚だ。

人に何かつくしてやっても豚に真珠をやるようなものだ。ドブに金を蹴こむようなものだ。そういう達観の上でするのならよいが。

「阿佐子の男の子って、誰よ、誰よ、悟でないとしたら誰よ」

レイ子は猛烈な好奇心でいっぱいになってわたしの膝を叩いた。それをしおに、わたしは立って、もう時間やねんとごまかしながらレイ子の軀ごと、押し出した。

ほんとに外は雨。それもかなりの雨脚だった。レイ子はまだわたしについて来たそうにしたが、わたしはタクシーを拾って、御堂筋^{みどうぎん}をミナミに下って貰った。ネオンがにじんで流れている。窓からひよい、と見ると、レイ子は雨に濡れそぼちながら、タクシーを拾おうとして、眼を見開き、見栄も張りもなく大声でわめいて手をあげていた。

ミナミへ下る御堂筋の道は、わたしの好きな都会の顔だ。

ああ、こんな夜、都会にるのは好きなのだ、わたしは。明るい灯と、白い雨。舗道も並木も濡れに濡れて、車が走ると烈しい飛沫があがる。並んで走っている車のしぶきが、こちらの窓にまともにはねて、まるで船室にいるような気がする。私はあおりをくらって頭を打ちつけて文句を

いった。

灯が左右をとんで流れてゆく。あたりは光の洪水になる。あの灯のなかで、わたしを待っている男がいる、と思うと、心臓が破れそうになる。女という女は、男に逢いにゆくとき、みんな、こんな気がするのかしら。

車がミナミへ近づくにつれて、わたしはだんだん、嬉しさのあまりに辛くなって、どうかして、彼と別れたいと思った。彼というのは悟ではない。キヨシなんかでは、むしろない。

信吉である。

若い運転手はバックミラーからわたしをじっと見ていた。彼の席のあたりは、雨で窓をしめきっているので、安ボマードのにおい**がぶんぶん**していた。

「どこへ着けますか」

わたしは道頓堀へ着けて貰った。

雨のなかを走りながら、わたしは信吉がどうかして帰ってしまったくれればよい、と思っていた。何べん、いままでこんなにドキドキしたことだろう。でもそのたびに、やっぱりこと新しく息切れする。眼がくらんでくるように思われる。早く「恋愛なれ」したいものだ。

バー「ヘンリ」のドアをあけて下りてゆくと、暗くて人の顔が見えない。信吉がいるかどうか、わからない。わたしは昂奮のあまり階段で転んでしまった。

ぱっと見たけど、冬木信吉はいないみたいだった。客は四、五人、見知らぬ男ばかりだ。

わたしは眼が**早い**、迅すぎて自分でも困るんだ。一瞬にしてわかつちゃうのだ。

何もかも見えすぎる。見えすぎる不幸と哀しみというのは、あるものだ。信吉がわたしのことを、わたしと同質の気持で愛していないことはわかっているのだ。この辛さ。なまじボンヤリ女だったら、まだはかない希望をかけて夢を見ていることが出来るかもしれないのに。

わたしの姉は（彼女は四十五である）口ぐせによく、「女賢しゅうして牛売りそこなう、や。女のかしこと男のあはは釣りあう、ともいうねんで」

と、女だてらに独立してきままな暮らしをしているわたしをたしなめている。

だが、わたしがかしこ（賢者）であつたとて、わたしの責任ではないから仕方がない。

一番奥のカウンターの止まり木に坐って、

「電話、なかった？」

バーテンの徳さんにいってみた。徳さんはおとなしい中年男で、分をわきまえて出しゃばらず、卑しくないところがわたしは好きである。マスターは徳さんの兄貴の老人だ

が、ほとんど店にいたことはない。八人入るといっぱいになる店で、もう一人パーテンの「若いほう」がいるだけ。

「いいえ」

と徳さんはグラスを拭きながら、

「少なくとも開店以後はね」

と、ちらとわたしに眼をあげていった。まじめな顔をしているのに、いつも微笑しているような、やわらかな表情があつて、わたしは好きだ。

「そんなら、来るのやな」

「待ち合せ？」

「その約束やけど。冬木さん」

「なら、来はりますよ。冬木さんはたしかですから」

「わたしよりもね」

「誰よりもですよ」

徳さんは寛大にいった。

こんな、とるに足らないやさしさでも、わたしを感動させる。わたしにはやさしいコトバは、たとえ骨を投げられるようなやさしみでも、毒である。自主独立の気概を腐敗させるといふものだ。それでわたしは、ブスツとした顔をうつむけて、誰からも話しかけられないように警戒しながら、ウイスキーの水割りを飲んでいた。

わたしは酒も煙草ものむが、べつに中毒患者ではないので、さして、おいしくてたまらぬことはないし、断つと苦

しいこともない。美味しくもないが不味くもなかった。ただ、ときによると、ウイスキーはひどくにごく感じて（おしっこみたいな色してる）といやになることもある。そうかと思うと、いくらでも飲めて、すずしく快く、のどを通過してゆくこともある。今夜はまだどちらともわからなくて、前者のような予感がある。

「あ」

と、徳さんが小さくいったので、わたしはドキンとした。来たのだ。きつと。彼が。

「いらっしやい」

と「若いほう」のパーテンがいつている。この男は名なしの権^{ごん}ベエで、バー「ヘンリ」では「若いほう」で通っているのである。

「やあ、こんばんは」

信吉の声がする。

わたしは自分のカンが鋭すぎるので、いやになる。

そして、こんなに彼のことがよくわかり、明察できるといふのは、不吉な前兆みたいな気がして、しかたがない。

信吉のさきの挨拶は、徳さんたちに向けたものだったので、わたしのそばへ坐ってから、あらためて、

「こんばんは。遅くなつてごめん」

とわたしにいった。信吉の服の匂いもおぼえているし、いろんなしぐさもそらんじている。美しい男で、可愛い横